

(城西人文研究第 26 卷)

## アンドレ・ジッドの方法 XVI

——『インモラリスト』

— そのマニュスクリを追って(6) —

鈴木 たけし

なぜ、このシリーズを続けて行くのかと、自分に問いかけることがある。最近手にした、外国人向けの簡明なフランス文学史をみると、ジッドとヴァレリーが「言葉の二大作家」(*Deux Maîtres de Langage*)<sup>(1)</sup>とくくられている。この書はあまりくわしく言及はしない。やさしい入門書のゆえだろう。しかし、教育の場でも、この両作家が言葉の作家とされていることは、やはりジッドは文体、というより文そのものの作家としてとらえてよいのだろう。したがって、彼の「文」について執拗に分析していくこともよいだろうと私は思う。

また、私の分析は、ディセルタション風のテキスト・クリティックだ。しかしそれ以外、実のところ、私は方法を選べない。文の分析は、フランス独特のディセルタション、テキスト・クリティック以外ないと思える。かつてアメリカ産のニュークリティシズムが批評の方法としてもはやされたころ、一仏文学者が、フランスではテキスト・クリティックという方法が以前からあるので、今さらニュークリもないと言うのを讀んだことがある。そう私も思う。今回も、ディセルタション風の分析とマニュスクリの参照を続けていきます。

(1) La littérature française (NATHAN)

今回は、第一部、7, 8, 9章をみでみる。この三章は、共通した同じ構造をしている。章の最初に語られたことが、章の最後に否定されるという枠構造だ。

それが章中で、微妙に巧みに操作されるので、最後の否定も読者に心持よいニュアンスと心象をのこし、否定されたとは気付かないかも知れない。不明瞭だがある感傷的な余韻を残すようにみえる。しかし、歴然と否定されているのだ。

## 第7章

このVIIは、矛盾に満ちている。パラドックス、アイロニーなどともいえない矛盾だ。それは稚気に近い。まず、三段階にわけてみる。

### 第一段階

アマルフィで、ミッシェルは顎と頬のひげを剃った。岩の上で最初に裸になった日以来、ひげは脱ぎすてられない衣服のように不快なものとなった。嫌悪で、突然、街の床屋に走った。しかし剃った後、かれは喜びでなく恐怖を感じた。故知れぬ怖れを実感した。自分の考えがむきだしにされ、人に知られるような気がしたのだ。

突然のミッシェルの行為。それは、馬鹿げたことと言われると気づきながらも、彼の新しい人間のためには大切なことだという。しかし、この新しい人間は恐ろしいものだと言いながら、それが何か、彼は説明できない。

### 第二段階

彼は、何かわからぬ新しい人間がつくられるのを待ちつつ生きる。デカルトのように、行動の仮りの姿をとりつつける。この頃、「考える」(penser) という動詞に導びかれ、デカルトがあらわれる。考えても、考えても彼には新しい人間は、わからないということだ。そして、身勝手な結論にむかう。

——私のまなざしの変りようは、本当だった。とりわけ髭なしの私が顕われた日には、私の顔だちの新しい表情は、多分、彼女を不安にさせたろう。けれど私をはっきり視るには、彼女は私を愛しすぎていたのだ。p.55 ll. 42-45

ということは、愛はすでに彼女への愛ではない。彼にだまされる程、彼女は愛していたとは、ミッシェルの妻への愛は、すでに偽だということだ。マルスリーヌをだます。というより、記述から考えると、ミッシェルの方でこう断言しているといえる。「マルスリーヌは、このようにしてそれを思い違えることができた。」「できた」は、冷静な事実の断言として単純過去におかれている。

### 第三段階

妻マルスリーヌの愛していた人間は、ミッシェルの「新しい人間」ではない。それを隠す努力をすることでは、過去に忠実であったが、日々、彼自身は偽りの姿となっていた。

——マルスリーヌと私の関係は、……同じままであった。この関係は、しかし、より大きくなる愛によって、日に日により昂っていた。私の偽り自体、愛をいや増してさえいた。p.56 ll. 54-58

嘘、偽りが、大きな愛となり、愛をいや増したとは、すでに矛盾を乗り越し、身勝手な自己弁護になりおおせている。さらにミッシェルは、妻との偽りの関係をゲームと言い、その分析をこころみる。

——マルスリーヌとのこのゲームに、私は……のめりこんでいた。無理して嘘をつくことは、当初はすこし骨が折れた。しかし、最悪とみなされたことも、犯されていない限りは、難しいが、くりかえせば、やがて自然なことになるとすぐに理解するようになった。このような結果……偽ること自体に喜びを感じるようになり、……未知の私の才能のゲームのようになった。そして、日々、より豊かで充実した人生の中で、より味あい深い幸福にむかって進んでいた。p.56 ll. 59-72

## マニユスクリ

上に語ったことと関わるマニユスクリの変化をみてみよう。

p.56 l.60 sans cesse の後に次の長文があり削除された。

——次いで、真実への激しい「愛」が私を燃えさせたせていたと、当時、思っていた。そして、どれほどマルスリーヌへの「愛」がより大きなものと思っていたことか。というのも私は、彼女のために「この愛」を献げていたからだ……。

削除された文中にも矛盾した、わかりにくい「愛」について語られる。まず、「真実への激しい愛」が彼を燃えさせたせていたが、マルスリーヌへの愛はそれより大きく、というのも、彼女のためにこの愛（真実への愛）を献げた（犠牲にした）からだ。

すなわち、二つの愛があり、一つは真理、ミッシェルの新しい人間への愛があり、今ひとつが、マルスリーヌへの愛となるだろう。したがって、「真実への愛」を隠すことが、マルスリーヌへの愛となる。

いずれにしろわかりにくい。偽りの愛を饒舌に語ることをさけるため、この文は削除されたといえるだろう。

ll. 69-70

...elle exerçait en moi des facultés reconnues → ...à m'y attarder comme au jeu de mes facultés inconnues

「私の中に認められた能力を行使した」 → 「知らなかった能力のゲームのように」

全く、反対の意味となる。ミッシェルは、このゲームの能力を確信していたが、「未知の能力」と変る。

この前にも、l.47に「再生」(renaissance)が、「認識」(reconnaissance)

に変わっている。「新しい人間」を得意げに「再生」と自讃してしまった後、まだ確定していないものと認識するに変わった。作者は、ミッシェルの妻への愛が否定されていること、新しい人間が真実であることの断定をさけながら、巧みな操作で、上手に隠しながら、読者にその余韻をのこしていく。

## 第8章

大活劇—この作品でただ一ヶ所の活劇風シーン

この章も矛盾に満ちている。ただ、この作品全体の中で、ただ一ヶ所の活劇風シーンがある。これはおもしろい。その場面をみてみよう。

—私は、ポジタノに近づいていた。と突然、車輪の音と変な低音の歌声が、私をふりかえさせた。断崖に沿う道のまがり角のせいで、はじめ何も見えなかった。次いで、常軌を逸した速さで、馬車が現れた。何とマルスリーヌの車だった。御車は、頭が割れるばかりの大声で歌っていた。……座席から立ち、逆上した馬を凶暴にむち打っていた。何という狼藉者！私はただよける間しかなく、私の制止の声にもとどまらず、車は目の前を通過した。……私はマルスリーヌが跳び上がり、落ちるのを同時に見て、恐れ戦いた。馬の暴走は、彼女を海の中につき落とすだろう……突然、馬が崩れ落ちた。マルスリーヌは下り、逃げようとした。がすでに私は彼女の横にいた。御者は私を見るなりすさまじい罵りを発して私をむかえた。私は、激怒した。彼の罵りを聞くやいなや、私は飛びかかり、容赦なく座席の下に落とした。車の床の上で彼とところがあったが、私は優位を保った。彼は落ちたとき気を失ないかけたようだ。彼が嘔みつこうとすることを見て、顔面に一撃を食らわせたので、さらに彼は朦朧となった。それでも私は彼を離さなかった。胸を膝でおさえこみ、腕を封じた。私は彼の醜い顔を見た。私の一撃で、それはもっと醜悪になっていた。彼は唾を吐き、よだれをたらし、鼻血を出し、罵った。何と

醜い男だ、……絞め殺しても法にかなうと思えた……そして多分やっただろう……少なくともそれができると私は感じた。そして警察という考えだけがそれを押しとどめたのだと思う。pp.57-58 ll. 15-44

その後、見つめあい、はげしい接吻を二人は交わす。しかし、ミッシェル自身「危険は大きなものではなかった」という。なるほど、このこの大活劇を仔細に読むと、馬車の暴走は、妻の命にかかわったかも知れないが、ミッシェルの闘いは、あまり危険ではない。御者は、まず酔っていた。座席から床に落ちたとき、彼は気を失ないかけていた。彼を振り伏せるのは、さほど難しくはない。この英雄は、おまけに、絞め殺そうとして思いとどまるのは、警察という考えひとつだ。大活劇は奇妙にこっけいでさえある。どうしてだろうか。

その晩、ミッシェルはマルスリーヌを「所有した」。言葉のあいまいさは、品格のため直截な表現を避けたのだろうか。

しかし続く記述は、奇妙に矛盾した、理解しがたいもの、大活劇と愛の記述は、しごく消極的なもの、あるいは否定的なものになっていく。

——私がマルスリーヌを所有したのは、その夜のことであった。

私が愛のことには初心だとみなさんは知っていたか、それとももう一度言うべきか、多分、私たちの結ばれた夜におとずれた恵みは、この新鮮さのおかげだろうか……。というのも、今日思い出してみるに、この最初の夜が唯一のものであったように思える。それほど愛への期待と喜びが悦楽の快感を増していた。

それほど、最も大きな愛には、思うに唯一度の夜で充分なのだ。そしてそれほど、私の想いでは、あくまで一度だけのことと思いつくとするのだ。それは、そこで私たちの魂が融け合う一瞬の笑いであったろう……。しかし、私が思うに、魂が後に……乗り越えようとしても無駄であった唯一の、愛の一点でもあったのだ。思うに、魂がその幸福を蘇らせるため努力すると、逆に幸福を失なわせる。思うに、幸福の思い出ほど、幸福を妨げるものは他に

ない。ああ、この夜を私は思い出す…… p.58 ll.55-70

この文は、矛盾に満ち、にもかかわらず恣意的にある結論をみちびこうとする。奇怪な文章だ。何度読み直してもすっきりと理解できない。

大活劇の後、病いだったせいか、彼は、はじめて妻を抱く。それはわかる。そして初心な彼は、その新鮮さで、いや増す快樂をおぼえる。次にわからなくなる。「だからその最初の夜が唯一のものであったように私には思える」とは、どうしてだろう。愛は、継続と増大を予想させるはずだ。他方、唯一のもののように思えたという婉曲な表現とうらはらに、むしろ恣意的にそれを肯定するための説得がつづいていく。大きな愛は一度でよい、あくまで一度だけのことと思えそう、一瞬の笑い。

この喜びは、ミッシェルによって、むしろ否定されるようにとれる。そして「しかし」の後、愛は乗り越えられぬもの、その愛は、幸福を失なわせるもの、この幸福の思い出は、幸福を妨げると結論する。何度読みなおしても納得できない。なぜだろうか。

前掲の文を受けて、物語は突然、悲壮となる。

——夜明けの光が、大きく開かれた窓から自由に入ってきた。私は、静かに起きた。そしてやさしくマルスリーヌの方に身をかがめた。彼女は眠っていた。眠りながら微笑んでいるように見えた。私は彼女より強くなっていたので、彼女がより繊細にみえ、彼女の優雅さは弱さに思えた。

激しく乱されたいろいろな考えが、私の頭の中に渦巻きはじめた。 pp. 58-59 ll. 73-79

すでに否定された「一瞬の笑い」がマルスリーヌの顔にうかぶ。それを見て、ミッシェルは混乱する。大活劇の後の愛の昂りが、憐れみになってゆく。

——彼女がこう言っても、嘘ではないと思った。私が彼女の全てだと。……彼女の喜びのために、いったい何が出来るのか？ 私は、一日中、毎日、彼女をほっておいた。彼女は私から全てを待っていた、私はといえば、彼女を顧みなかったのだ！ ……ああ！ かわいそうなマルスリーヌ！ ……涙が私の目にあふれる。……今では、私は彼女より強くなっていたのではないか？

p.59 ll. 79-87

強調されるのは、今や夫が強くなり、妻が弱くなったことだ。愛の源泉が、夫の強さと妻の弱さとの落差となりおおせる。

ここで、笑いが、まさしく一瞬のものとして消え去り、夜明けの光は、暗さを象徴するかのようになる。

——微笑は、彼女の頬から消え去っていた。夜明けの光は、ものひとつひとつを金色に輝かせていたにもかかわらず、突然、彼女の顔は悲しげに、青白く私には見えた。……そして、多分、朝の訪れが、強い不安を私にいだかせたのだろうか。

いつの日か、私の番で君の世話をすることになるのだろうか (devrai-je?)。きみのためには心配することになるのだろうか。p.59 ll. 88-92

この突然の変化は、一見、理解できない。夜明けの光は、どう考えても希望や幸せを喚起する。しかし、マルスリーヌの顔からは微笑が消え、悲しげな青白い顔となる。そして最も矛盾するのは、「朝の（光の）訪れが、強い不安をいだかせた」ことだ。ここでは、矛盾というより、恣意的で意志的な論理の転倒とみる他はない。それ以前の弱い妻を守るという言葉とうらはらに、逆に、それが将来の不安となり変ったのだ。その不安を心の中で「叫ぶ」のだ。愛は、一瞬のうち、不安の中で否定された。だから……。

——私は身震いした。そして愛と憐憫とやさしさに凍えさせられて、彼女の



閉ざされた目のあいだに、愛に満ちた敬虔な口づけをした。p.59 ll. 93-96

この章、最大の矛盾だ。愛について語っているように思われるが、愛に関わる言葉の羅列を動詞がその意味を全く転倒させる。「身震いし、愛に凍えさせられた」この一節は、けして愛を語っているとは言えまい。愛は、冷たく凍えて消えた、と思わざるをえない。

### マニユスクリ

マニユスクリにあらわれた二人の愛をめぐる記述をみてみよう。

p.57 l. 14 déjeuner の後

「彼女がいることは一言でよいだろうか、一ほとんどいつもうさかった。確かに彼女を愛していたが、この愛の中からさえ、軽い束縛が生れていた。彼女を必要とはしていなかったのだ。それに、彼女の方も、私を必要としえたか、私にはわからない。

酔った御者からマルスリーヌを救い、その夜、彼女を抱いたミッシェルと、あまりにもかけはなれた記述となるので、削除されたと思われる。しかし、生のマニユスクリ文から、この章の結論、妻への愛など本当はないことがうかがわれる。

この後の「大活劇」のマニユスクリは大部混乱している。この段落では、混乱はスピード感のある文体をつくる努力跡とみられる。

p.57 l. 22 affolé の後

「すでに他のコースで、私たちは、彼が酒け飲みであると知らされていたが、この忠告を気にかけていなかった。」→ 削除

スピード感のある文体には、邪魔な説明で削除。

p.57 l. 24 à mon appel の後

「妻がためしてみたこと（合図）にもかかわらず、私は、その意味を理解できなかった。彼女が真青になっているのを見て、しぐさはいま見たが、理解できなかった。後で彼女が言うには、合図の目的は、もっぱら私を安心させるためだったとのことだ。」→ 削除

大部混乱した文で、スピード感をそこなうため削除。他方、大活劇の中で、マルスリーヌが落ち着いた行動をしたともとれるので、削除。

この後、マニユクリでは、完成テキストにあらわれない妻の姿が、次から次へと語られている。

p.58 l. 44 ...m'arrêta の後

「しかしながら、このままというわけにはいかなかった。（くみふせて）この男の上にいる私の立場は、その重要性を失なうや、滑稽なものになった。賢いマルスリーヌは、私をその状態から脱け出させてくれた。突然、彼女はロープに気づいた。……荷物を縛りつけるロープに気づいた。それをほどき、投げ縄結びをつくり、私に投げた。私は、造作なく彼を縛り、袋のようにした。そして車の床に投げた。」→ 削除

御者をひざ下に組みふせたミッシェルは、その後、どうしてよいかわからなくなる。そこで、妻が気転をきかせ、縄を渡してくれた。それも縛りやすいように投げ縄のように結びを作って。妻に助けられて、ミッシェルは御者を縛れた。

まさしく、悲劇に打ち勝つヒーローの話に、この文はそぐわない。このように、滑稽とアイロニーの技法が、読者に安堵感を与えられる。

しかし、ヒーローをきわだたせ、結論にむかうためには、削除したといえる。

p.58 l.51 et la donner toute avec joie の後

「このため、私たち二人のあいだに、ある種の感謝の気持ちが生れてきた。まるで、彼女のために私ができたことで、彼女に感謝し、あるいはむしろ、彼女のためにこれからできると今や思えることに感謝しているかのように。」

→ 削除

マルスリーヌへの手離しの感謝となり、完成テキストと趣きが違うため削除。

p.58 l.54 Sorrente の後

「彼女が私に言うには、車が気違い御者と荷物と、で私がいまま、汽車のように道を走るのを見たら、あなたは、どれほど怖がったことでしょうか。……。それで、私は、飛びおりののをがまんしたの。」→ 削除

ますます妻の努力、存在が強調されるので不適當。

二人の肉体的愛の記述では、マニュスクリは、テキスト以上に、一層混乱している。

p.58 l.60 ...fut la seule の後：

「その後（同じような）夜を思い出させるようなものは、何もない。やがて官能を求めて私たちが探しあてたものは、その思い出だけだった。私たちのあのような純粹さの恍惚、あの驚き、不安を思い出させるものは、何もない。

あれは、私たちの魂が一つに溶け合った唯一の時であった。

同時に、どうしてあれほど待つことができたのか、私にはわからなかった。でも、あれほど待ったことにも喜びを感じた。

なぜなら、私たちの愛は、それによって大きくなったし、官能は互いに二人がそれを知ることで、一層、美しいものに私たちには思えた。

和訳は、無理に解釈したところもあるのは、フランス語マニュスクリそのものが、混乱しているからだ。他方、完成テキスト自体も混乱を脱していないことは、先に書いた。

他方、さらに妻の存在が美しく語られる。

p.59 l.83 ...délaisé! の後：

「私はといえば、幸福と人生を彼女に負っている。それで、私は彼女のために何ができるのか。しかし、彼女は私に何も要求しない。彼女は何かを待っているかのように私には思える。そして彼女は、私のむっつりとした無関心に対して、彼女自身は、……忍耐強い愛情をいただいているように思える。」

→ 削除

ますます、マルスリーヌは、忍耐と節度のある女性と描かれる。マニュスクリのこのような彼女への讃嘆が、全て削除され、テキストでは、ある論理、妻の否定へとすりかえられている。

## 第9章

前章の矛盾に満ちた妻マルスリーヌへの愛そして幸福について、振り出しに戻るかのように、この章の冒頭ははじまる。

p.59 ll.1-6

「……ほほえむおだやかな日々……このような休息、このような幸せ、

……その後、このようなことを味わった (goûté, goûterai) ことがあるのだろうか。

……いつもマルスリーヌのそばで、自分にかまけることなく、彼女にかまける (m'occupant moins de moi, je m'occupais plus d'ells) 喜びを彼女と語る。

「自分にかまけることなく、彼女にかまける」という第一文の否定による意味の肯定と次の文と、意味の肯定の二文の並置は、その他の前章よりのくりかえしを含め、幸福をめぐるミッシェルのからまわりをむしろあらわにしている。

さらに、goûté, goûterai と goût にかかわる語は、静かにほほえむ幸福を損なっていく何かを暗示している。

さて、ミッシェルは、無為の放浪生活をやめ、研究にもどろうとする。マルスリーヌは喜ぶ。しかし彼が再開しようとする研究は、以前と同じ好み (goût) によらない。その説明は、このテキストの簡明な文と違い、長文で複雑だ。なぜだろう？

——みなさんに言ったように、病気以来、過去の抽象的で偏よらない知識は、私にはむなししいものに思えてきた。p.60 ll. 19-21

その後、続いてピリオッドまでの文が長く続く。それを示すため和訳では点で区切りをつけていく。

——そしてもし、少し前まで、例えばラテン語の変遷へのゴード語の影響部分を明確にしようとして、テオドリック、カッシドール、アマラゾントの顔、そして彼らのすばらしい情熱を、無視し、理解しないでいたので、彼らの人生の残滓と記号にもっぱら夢中になっていたのだが、今や、これらの同じ記号と文献学全体が、その野性的偉大さとその高貴さが私に見えてきたものの中によりよくつき進む方法としてのみ私にとっては存在した。p.60 ll. 21-30

以上、ピリオッドなしの文である。これは、ミッシェルの学者としての銜学的文体ととってもよいだろうか。次の並列をみてみよう。

「……彼らの人生の残滓と記号にもっぱら夢中になっていた」<sup>(1)</sup>

「(その野性的偉大さと高貴さと私に見えてきたものの中によりよくつき進む方法としてのみ私にとっては存在した。)」<sup>(2)</sup>

(1) ...pour ne m'exalter plus que sur des signes...

(2) ...Ne m'étaient plus que comme un moyen de...

同じ構文 (ne ...plus ...que) が、全く対立する文意につかわれている。何よりも、この段落の冒頭にまた“goût”が使われている。この文は、このように、一見、説明と論理化という理性を感じさせるが、実は、変らず、非論理とその危機を含む文と思われる。

ここで、東ゴードの歴史を少しみてみよう。

5世紀から6世紀、東ゴード族は、東、西ローマ帝国とかかわりながら、序々に力をたくわえ、大テオドリック王は、ついにイタリアを支配することになった。彼の死後、後継者として迎えられた娘婿エウタリックも急死、その息子アタラリックが大王を継ぐことになった。彼は、まだ10歳だった。とりあえず、母アマラスウィンタが摂政として政務にあたった。母は賢こく、当初は、東ゴードの安定を計った。

しかし反アマラスウィンタ派は、彼女への攻撃の矛先をアタラリックの教育方法にむけた。彼をだきこむ魂胆だった。新王は、16歳になり元服も近い。

若い王の受けているのは、非ゴード的教育だった。すなわちローマ的教育だ。ギリシャ・ローマの教養の深いアマラスウィンタがこの方向で教育させたが、反対派は、テオドリック大王の決めた基本原則にあわないと非難した。アタラリックは、ゴード的教育をうけることになったといえは聞こえがよいが、放蕩の限りをつくすことになった。結局は、酒に溺れ、女に精をつかいはたし、若

くして死んだ。暗殺の噂はあったが、誰の目にも彼の死は予測できたといえる。

以上、坦々と、松谷健二氏は、その著、『東ゴード興亡史』で語っている。ただ少しページをおいて、「幼少で没したアタラリックは未知数だった。長じていたらことによると名君になったかもしれない」と結ぶ。

著者も、彼に、何か気になるものを想うのかもしれない。

さて、ミッシェルも、この夭折した王に、異常な興味を示す。

——しかし、告白するのだが（単純未来）、若き王アタラリックの姿が私をもっとも魅きつけるものだった。p.60 ll. 35-36

その後、前段落と同様、ピリオッドなしの文が続く。

——私は、この15歳の子供を想像した、ゴード人より密かに唆かされ、母アマラゾント（アマラスウィンタ）に反抗し、ラテン的教育に逆らい、窮屈な馬具に去勢されてない馬がするようにローマ文化を投げ捨て、そしてしごく賢い老カシドールの教育より、非文明化されたゴード社会を好み、彼と同じ年の粗野なお気に入りとともに、野蛮で、官能的で、解放された生活を数年間味合った（goûter）後、結局、放蕩にひたりきり、ぼろぼろとなり18歳で死んだ。pp.60-61 ll. 36-45

なぜ、このアタラリックにこれほど興味をひかれるのか。

——私は、より野性的で無垢な状態へのこの悲劇的発露の中にマルスリーヌが笑いながら名付けた「危機」（crise）といった何かを見出していた。少なくとも私の精神をそこに集中させる言動一致を求めていたのだ。というのも、もはや私の肉体に専念することはなかったから。それで、アタラリックの醜悪な死の中に、私は私の力の限り、ある教訓を読まねばならないと確信して

いた。p.61 ll. 45-51

ミッシェルの説明には、飛躍がある。無理にアタラリックから「教訓」をひきだそうとする。

彼は、肉体的なもの（アタラリック）に、彼の精神を一致させるべく言動一致を求める。なぜなら、彼の方は、もはや肉体だけに専念していないからという。精神的なもの、論理的なことを、無理矢理、アタラリックの悲劇的で肉体的なことに、結びつけようとする。他方で、ミッシェルは、肉体への興味はなくなっているように言う。説明は飛躍し、矛盾する。肉体にもはや興味を失ったとするミッシェルが、アタラリックの肉体に精神を一致させようとするのだ。だから「教訓を読みとらねばならない」という意志的に、あるいは強引に自分の考えを肯定せざるを得ないといえよう。この章、ミッシェルは学者としての自分をとりもどしたかのように終るが、すでに破綻しているようだ。

互いに旅に厭きた二人は、旅をはやく切り上げ、また、研究のための静けさを必要として、母の領地であるノルマンディーのモリニェールで夏を過ごそうと思う。このように「未来」についてマルスリーヌと語ることに、ミッシェルは、新鮮な喜びを感じる。

さらにナポリで、ミッシェルの将来（未来）を約束するコレージュ・ド・フランスの講座の話が待っていた。

しかしここで、幸福についての奇妙な、というより、全てを覆すような文で、この章が終る。そこでは、時制が全てを語っているかのようだ。

——旅の終りのあいだ、私たちの幸福は、しごく変化なく静かであった（fut）ので、私は（今）語れることは何もない（peut）。人間の最も美しい行為は、頑固に悲痛なものである（sont）。幸福の物語など何になろう（serait）。幸福を準備するもの、次に幸福を壊すもの以外（prépare, détruit）、語られるべきではない（se raconte）。それで、今、私は、幸福



を準備したもの (avait préparé) を語ったのだ (ai dit)。p.62 ll. 95-100

語られるその時点の現実 (fut), 語る今の現実 (peut), 一般的な事実としての現在 (sont, prépare, détruit, se raconte), そして語気換和としての (serait)。そして, その時点の過去であった大過去 (avait préparé), そして, 章が終るにあたっての「言った」とい感じの現実 (ai dit)。

まさしく, それまで語られた内容を, 現実, そのときの現在が, 全てを否定するかのようだ。読者は, この章の冒頭の幸福感, さらにぐずぐずとその幸福感をひきずり, 数行前まで, 幸福につつまれていくような雰囲気の中にいたはずだ。しかし, 幸福はまったくくつがえされるという予見で, この章は, ぼんと閉じられてしまった。

冒頭をふりかえてみよう。

——ソラントで私たちが過ごした (vécûmes) 数日間は, 晴やかで, とても静かな日々であった (furent)。私はかつて, このような休息, このような幸福を味合ったことがあったろうか (Avais-je goûté)。そしてその後, このようなことを味合うだろうか (goûterais-je)。

私は, たえず, マルスリーヌのそばにいた (étais)。自分にあまりかまけることなく (m'occupant), 私はより彼女に専念し (m'occupait), 以前にはだまっていた私のもった (prenais) 喜びを彼と一緒に語れるようになっていた (trouvais)。p.59 ll. 1-7

ここでは, まさしく未来に続く幸福であるととれる。

現実には生きた (vécume) 日々は, そのとき晴れやかで静かであった (furent) 事実であった。その過去以前には味合ったことのなかった (Avais-je goûté) 幸福であった。その後の未来にも味合えるだろうか, といくぶん不安をおわす。しかし, 反過去でみちびかれる後半, 読者には, 将来につづく

幸福と思えただろう。

続いた7, 8, 9の三章, つねに最初に語られた幸福が, 章の終りに否定されている。しかし, 読者には, 何か, 余韻のようなものが感じられ, 全くの否定とは思えない。

### マニュスクリ (仏文)

p.56 l.60 ...sans cesse の後 :

puis je croyais encore, alors gu'un intense **amour** de la vérité me brûlait; de combien pensai-je, **celui** pour Marceline est-**il** plus grand, puisque je lui sacrifie **cet amour**.

Et peut-être cette contrainte au mensonge me couta-t-elle beaucoup d'abord, ainsi donc comme à chaque chose pour laquelle un dégoût est surmonté. → ナシ

p.57 l.14 ...déjeuner の後 :

Sa présence,hélas, l'avouerais-je? m'était presque souvent importuné. Je l'aimais oui, mais de mon amour même une légère contrainte naissait. Je n'avais que peu besoin d'elle et ne comprenais pas encore qu' elle put avoir besoin de moi. → ナシ

p.57 l.22 ...affolé の後 :

Déjà pour d'autres courses nous avons vu cet homme et l'on nous avait averti qu'il buvait — avertissement dont nous n'avions pas tenu compte. → ナシ

p.57 l.24 ...à mon appel の後 :

...et malgré ce que put tenter ma femme dont je ne pus comprendre la signification; je l'entrevis très pâle, me faire /× un signe/ un geste que je

ne pus comprendre et dont elle me dit plus tard que son unique but était de me rassurer. → ナシ

p.58 l. 44 ...m'arrêta の後 :

Pourtant je ne pouvais rester ainsi at ma position sur cet homme, dès qu' elle cessait d' être tragique, devenait vraiment ridicule. L'habile Marceline m' en tira:avisant tout à coup les cordes dont on assujetit selon l'usage les valises derrière la voiture, elle put en/×détacher/ tirer, /×qu' elle me jeta/ y fut un nœud coulant, jeta le tout: je parvins, non sans peine, à ligoter solidement, comme un sac. Je le jetai dans la voiture.

→ テキスト

p.58 l. 51 et de la donner toute avec joie の後 :

Il naissait entre nous pour cela, une espèce de reconnaissance, comme si je lui savais gré de ce que j'avais fait pour elle, ou plutôt de ce que je sentais à présent que je pourrais faire pour elle. → ナシ

p.58 l. 54 ... Sorrente の後 :

/×Quelle peur n'aurais-tu pas eue, me dit-elle, en voyant passer comme un train sur la route, cette voiture avec ce ocher fou, nos malles et sans moi ..., C' est là ce qui m'a retenue de sauter/ → ナシ

p.58 l. 60 ... fut la seule の後 :

que rien après ne la (=nuit) put rappeler, et que ce fut son souvenir que, cherchant plus tard la volupté, nous cherchâmes.

Rien ne dira l' étonnement et l' inquiet, ravissement de notre pareille innocence.

Ce fut un unique moment où nos âmes se confondirent. Tout à la fois

je ne comprenais plus comment j'avais pu tant attendre et réjouissais d'avoir tant attendu.

Car notre amour en fut grandi et la volupté nous parut plus belle de ce que l'un à l'autre nous l'apprimes. → ナシ

p.59 l.83 ...delaissé!の後:

Moi, je lui dois le bonheur et la vie; et qu'est-ce que je sais faire pour elle?

Et elle me réclame rien; il semble toujours qu'elle attende; et qu'elle sache sa patiente affection plus longue que ma morose indifférence.

→ ナシ

## テキスト

ANDRÉ GIDE: Récit, sotie, roman (Pléiade)

pp.402-408

## VII

1 **A** INSI me contentais-je pour toute action, tout travail,  
2 d'exercices physiques qui, certes, impliquaient ma  
3 morale changée, mais qui ne m'apparaisaient déjà plus  
4 que comme un entraînement, un moyen, et ne me  
5 satisfaisaient plus pour eux-mêmes.

6 Un autre acte pourtant, à vos yeux ridicule peut-être,  
7 mais que je redirai, car il précise en sa puérilité le besoin  
8 qui me tourmentait de manifester au-dehors l'intime  
9 changement de mon être: A Amalfi, je m'étais fait raser.

10 Jusqu'à ce jour j'avais porté toute ma barbe, avec les  
11 cheveux presque ras. Il ne me venait pas à l'idée qu'aus  
12 si bien j'aurais pu porter une coiffure différente. Et,

13 brusquement, le jour où je me mis pour la première  
14 fois nu sur la roche, cette barbe me gêna; c'était comme  
15 un dernier vêtement que je n'aurais pu dépouiller; je la  
16 sentais comme postiche; elle était soigneusement taillée,  
17 non pas en pointe, mais en une forme carrée, qui me  
18 parut aussitôt très déplaisante et ridicule. Rentré dans  
19 la chambre d'hôtel, je me regardai dans la glace et me d  
20 éplus; j'avais l'air de ce que j'avais été jusqu'alors:  
21 un chartiste. Sitôt après le déjeuner, je descendis à  
22 Amalfi, ma résolution prise. La ville est très petite: je  
23 dus me contenter d'une vulgaire échoppe sur la place.  
24 C'était jour de marché; la boutique était pleine; je dus  
25 attendre interminablement; mais rien, ni les rasoirs  
26 douteux, le blaireau jaune, l'odeur, les propos du bar-  
27 bier, ne put me faire reculer. Sentant sous les ciseaux  
28 tomber ma barbe, c'était comme si j'enlevais un masque.  
29 N'importe! quand, après, je m'apparus, l'émotion qui  
30 m'emplit et que je réprimai de mon mieux, ne fut pas  
31 la joie, mais la peur. Je ne discute pas ce sentiment; je le  
32 constate. Je trouvais mes traits assez beaux ... non, la peur  
33 venait de ce qu'il me semblait qu'on voyait à nu ma pen-  
34 sée et de ce que, soudain, elle me paraissait redoutable.

35 Par contre, je laissai pousser mes cheveux.

36 Voilà tout ce que mon être neuf, encore désœuvré,  
37 trouvait à faire. Je pensais qu'il naîtrait de lui des actes  
38 étonnants pour moi-même; mais plus tard; plus tard,  
39 me disais-je, – quand l'être serait plus formé. Forcé de  
40 vivre en attendant, je conservais, comme Descartes, une  
41 façon provisoire d'agir. Marceline ainsi put s'y tromper.  
42 Le changement de mon regard, il est vrai, et, surtout le  
43 jour où j'apparus sans barbe, l'expression nouvelle  
44 de mes traits, l'auraient inquiétée peut-être, mais elle  
45 m'aimait trop déjà pour me bien voir; puis je la rassurais  
46 de mon mieux. Il importait qu'elle ne troublât pas ma

47 reconnaissance; pour la soustraire à ses regards, je  
48 devais donc dissimuler.

49 Aussi bien celui que Marceline aimait, celui qu'elle  
50 avait épousé, ce n'était pas mon «nouvel être». Et je  
51 me redisais cela, pour m'exciter à le cacher. Ainsi ne  
52 lui livrai-je de moi qu'une image qui, pour être constante  
53 et fidèle au passé, devenait de jour en jour plus fausse.

54 Mes rapports avec Marceline demeurèrent donc, en  
55 attendant, les mêmes – quoique plus exaltés de jour  
56 en jour, par un toujours plus grand amour. Ma dissi-  
57 mulation même (si l'on peut appeler ainsi le besoin de  
58 préserver de son jugement ma pensée), ma dissimulation  
59 l'augmentait. Je veux dire que ce jeu m'occupait de  
60 Marceline sans cesse. Peut-être cette contrainte au men-  
61 songe me coûta-t-elle un peu d'abord; mais j'arrivai  
62 vite à comprendre que les choses réputées les pires (le  
63 mensonge, pour ne citer que celle-là) ne sont difficiles  
64 à faire que tant qu'on ne les a jamais faites; mais qu'elle  
65 s deviennent chacune, et très vite, aisées, plaisantes,  
66 douces à refaire, et bientôt comme naturelles. Ainsi  
67 donc, comme à chaque chose pour laquelle un premier  
68 dégoût est vaincu, je finis par trouver plaisir à cette  
69 dissimulation même, à m'y attarder, comme au jeu de  
70 mes facultés inconnues. Et j'avançais chaque jour, dans  
71 une vie plus riche et plus pleine, vers un plus savoureux  
72 bonheur.

### VIII

1 **L**A route de Ravello à Sorrente est si belle que je ne  
2 **S**ouhaitais ce matin rien voir de plus beau sur la  
3 terre. L'âpreté chaude de la roche, l'abondance de l'air,  
4 les senteurs, la limpidité, tout m'emplissait du charme  
5 adorable de vivre et me suffisait à ce point que rien  
6 d'autre qu'une joie légère ne semblait habiter en moi;

7 souvenirs ou regrets, espérance ou désir, avenir et passé  
8 se taisaient; je ne connaissais plus de la vie que ce qu'en  
9 apportait, en emportait l'instant. — O joie physique!  
10 m'écriais-je; rythme sûr de mes muscles! santé!...

11 J'étais parti de grand matin, précédant Marceline  
12 dont la trop calme joie eût tempéré la mienne, comme  
13 son pas eût ralenti le mien. Elle me rejoindrait en  
14 voiture, à Positano, où nous devons déjeuner.

15 J'approchais de Positano lorsqu'un bruit de roues,  
16 formant basse à un chant bizarre, me fit tout à coup  
17 retourner. Et d'abord je ne pus rien voir, à cause d'un  
18 tournant de la route qui borde en cet endroit la falaise;  
19 puis brusquement une voiture surgit, à l'allure désor-  
20 donnée; c'était celle de Marceline. Le cocher chantait  
21 à tue-tête, faisait de grands gestes, se dressait debout  
22 sur son siège, fouettait férocement le cheval affolé.  
23 Quelle brute! Il passa devant moi qui n'eus que le  
24 temps de me ranger, n'arrêta pas à mon appel... Je  
25 m'élançai: mais la voiture allait trop vite. Je tremblais  
26 à la fois et d'en voir sauter brusquement Marceline, et  
27 de l'y voir rester; un sursaut du cheval pouvait la  
28 précipiter dans la mer... Soudain le cheval s'abat. Marce-  
29 line descend, veut fuir; mais déjà je suis auprès d'elle.  
30 Le cocher, sitôt qu'il me voit, m'accueille avec d'hor-  
31 ribles jurons. J'étais furieux contre cet homme; à sa  
32 première insulte je m'élançai et brutalement le jetai bas  
33 de son siège. Je roulai par terre avec lui, mais ne perdis  
34 pas l'avantage; il semblait étourdi par sa chute, et  
35 bientôt le fut plus encore par un coup de poing que je  
36 lui allongeai en plein visage quand je vis qu'il voulait  
37 me mordre. Pourtant je ne le lâchai point, pesant du  
38 genou sur sa poitrine et tâchant de maîtriser ses bras.  
39 Je regardais sa figure hideuse que mon poing venait  
40 d'enlaidir davantage; il crachait, bavait, saignait, jurait,

41 ah! l'horrible être! Vrai! l'étrangler paraissait légi-  
42 time – et peut-être l'eussé-je fait... du moins je m'en  
43 sentis capable; et je crois bien que seule l'idée de la  
44 police m'arrêta.

45 Je parvins, non sans peine, à ligoter solidement  
46 l'enragé. Comme un sac je le jetai dans la voiture.

47 Ah! quels regards après, et quels baisers nous  
48 échangeâmes. Le danger n'avait pas été grand; mais  
49 j'avais dû montrer ma force, et cela pour la protéger.  
50 Il m'avait aussitôt semblé que je pourrais donner ma  
51 vie pour elle... et la donner toute avec joie... Le cheval  
52 s'était relevé. Laissant le fond de la voiture à l'ivrogne,  
53 nous montâmes sur le siège tous deux, et, conduisant  
54 tant bien que mal, pûmes gagner Positano, puis Sorrente.

55 Ce fut cette nuit-là que je possédai Marceline.

56 Avez-vous bien compris ou dois-je vous redire que  
57 j'étais comme neuf aux choses de l'amour? Peut-être  
58 est-ce à sa nouveauté que notre nuit de noces dut sa  
59 grâce... Car il me semble, à m'en souvenir aujourd'hui,  
60 que cette première nuit fut la seule, tant l'attente et la  
61 surprise de l'amour ajoutaient à la volupté de délices,  
62 – tant une seule nuit suffit au plus grand amour pour  
63 se dire, et tant mon souvenir s'obstine à me la rappeler  
64 uniquement. Ce fut un rire d'un moment, où nos  
65 âmes se confondirent... Mais je crois qu'il est un point  
66 de l'amour, unique, et que l'âme plus tard, ah! cherche  
67 en vain à dépasser; que l'effort qu'elle fait pour ressus-  
68 citer son bonheur, l'use; que rien n'empêche le bonheur  
69 comme le souvenir du bonheur. Hélas! je me souviens  
70 de cette nuit...

71 Notre hôtel était hors de la ville, entouré de jardins, de  
72 vergers; un très large balcon prolongeait notre chambre;  
73 des branches le frôlaient. L'aube entra librement par  
74 notre croisée grande ouverte. Je me soulevai douce-



75 ment, et tendrement je me penchai sur Marceline. Elle  
76 dormait; elle semblait sourire en dormant. Il me sembla,  
77 d'être plus fort, que je la sentais plus délicate, et que  
78 sa grâce était une fragilité. De tumultueuses pensées  
79 vinrent tourbillonner en ma tête. Je songeai qu'elle ne  
80 mentait pas, disant que j'étais tout pour elle; puis  
81 aussitôt: «Qu'est-ce que je fais donc pour sa joie?  
82 Presque tout le jour et chaque jour je l'abandonne; elle  
83 attend tout de moi, et moi je la délaisse!... ah! pauvre,  
84 pauvre Marceline!...» Des larmes emplirent mes yeux.  
85 En vain cherchai-je en ma débilité passée comme une  
86 excuse; qu'avais-je affaire maintenant de soins constants  
87 et d'égoïsme? n'étais-je pas plus fort qu'elle à présent?...

88 Le sourire avait quitté ses joues; l'aurore, malgré  
89 qu'elle dorât chaque chose, me la fit voir soudain triste  
90 et pâle; – et peut-être l'approche du matin me dispo-  
91 sait-elle à l'angoisse: «Devrai-je un jour, à mon tour, te  
92 soigner? m'inquiéter pour toi, Marceline?» m'écriai-je  
93 au-dedans de moi. Je frissonnai; et, tout transi d'amour,  
94 de pitié, de tendresse, je posai doucement entre ses yeux  
95 fermés le plus tendre, le plus amoureux et le plus pieux  
96 des baisers.

## IX

1 **L** ES quelques jours que nous vécûmes à Sorrente  
2 furent des jours souriants et très calmes. Avais-je  
3 jamais goûté tel repos, tel bonheur? En goûterais-je  
4 pareil désormais... J'étais près de Marceline sans cesse;  
5 m'occupant moins de moi, je m'occupais plus d'elle et  
6 trouvais à causer avec elle la joie que je prenais les  
7 jours précédents à me taire.

8 Je pus être étonné d'abord de sentir que notre vie  
9 errante, où je prétendais me satisfaire pleinement, ne  
10 lui plaisait que comme un état provisoire; mais tout

11 aussitôt le désœuvrement de cette vie m'apparut;  
12 j'acceptai qu'elle n'eût qu'un temps et pour la première  
13 fois, un désir de travail renaissant de l'inoccupation  
14 même où me laissait enfin ma santé rétablie – je parlai s  
15 érieusement de retour; à la joie qu'en montra Marce-  
16 line, je compris qu'elle y songeait depuis longtemps.

17       Cependant les quelques travaux d'histoire auxquels  
18 je recommençais de songer n'avaient plus pour moi  
19 même goût. Je vous l'ai dit: depuis ma maladie, la  
20 connaissance abstraite et neutre du passé me semblait  
21 vaine, et si naguère j'avais pu m'occuper à des recherches  
22 philologiques, m'attachant par exemple à préciser la  
23 part de l'influence gothique dans la déformation de  
24 la langue latine, et négligeant, méconnaissant, les figures  
25 de Théodoric, de Cassidore, d'Amalasonthe et leurs  
26 passions admirables pour ne m'exalter plus que sur des  
27 signes et sur le résidu de leur vie, à présent ces mêmes  
28 signes, et la philologie tout entière, ne m'étaient plus  
29 que comme un moyen de pénétrer mieux dans ce dont  
30 la sauvage grandeur et la noblesse m'apparurent. Je  
31 résolu de m'occuper de cette époque davantage, de me  
32 limiter pour un temps aux dernières années de l'empire  
33 des Goths, et de mettre à profit notre prochain passage  
34 à Ravenne, théâtre de son agonie.

35       Mais, l'avouerai-je, la figure du jeune roi Athalaric  
36 était ce qui m'y attirait le plus. J'imaginai cet enfant de  
37 quinze ans, sourdement excité par les Goths, se révolter  
38 contre sa mère Amalasonthe, regimber contre son  
39 éducation latine, rejeter la culture comme un cheval  
40 entier fait un harnais gênant, et, préférant la société  
41 des Goths impolicés à celle du trop sage et vieux  
42 Cassidore, goûter quelques années, avec de rudes  
43 favoris de son âge, une vie violente, voluptueuse et  
44 débridée, pour mourir à dix-huit ans, tout gâté, soulé

45 de débauches. Je retrouvais dans ce tragique élan vers  
46 un état plus sauvage et intact quelque chose de ce que  
47 Marceline appelait en souriant «ma crise». Je cherchais  
48 un consentement à y appliquer au moins mon esprit,  
49 puisque je n'y occupais plus mon corps; et, dans la  
50 mort affreuse d'Athalaric, je me persuadais de mon  
51 mieux qu'il fallait lire une leçon.

52 Avant Ravenne, où nous nous attarderions donc  
53 quinze jours, nous verrions rapidement Rome et Flo-  
54 rence, puis, laissant Venise et Vérone, brusquerions la  
55 fin du voyage pour ne nous arrêter plus qu'à Paris. Je  
56 trouvais un plaisir tout neuf à parler d'avenir avec  
57 Marceline; une certaine indécision restait encore au  
58 sujet de l'emploi de l'été; las de voyages l'un et l'autre,  
59 nous voulions ne pas repartir; je souhaitais pour mes  
60 études la plus grande tranquillité; et nous pensâmes  
61 à une propriété de rapport entre Lisieux et Pont-  
62 l'Évêque, en la plus verte Normandie, — propriété  
63 que possédait jadis ma mère, où j'avais avec elle passé  
64 quelques étés de mon enfance, mais où, depuis sa mort,  
65 je n'étais pas retourné. Mon père en avait confié l'entre-  
66 tien et la surveillance à un garde, âgé maintenant, qui  
67 touchait pour lui puis nous envoyait régulièrement les  
68 fermages. Une grande et très agréable maison, dans un  
69 jardin coupé d'eaux vives, m'avait laissé des souvenirs  
70 enchantés; on l'appelait La Morinière; il me semblait  
71 qu'il ferait bon y demeurer.

72 L'hiver prochain, je parlais de le passer à Rome — en  
73 travailleur, non plus en voyageur cette fois... Mais ce  
74 dernier projet fut vite renversé: dans l'important  
75 courrier qui, depuis longtemps, nous attendait à Naples,  
76 une lettre m'apprenait brusquement que, se trouvant  
77 vacante une chaire au Collège de France, mon nom  
78 avait été plusieurs fois prononcé; ce n'était qu'une

79 suppléance, mais qui précisément, pour l'avenir, me  
80 laisserait une plus grande liberté; l'ami qui m'instruisait  
81 de ceci m'indiquait, si je voulais bien accepter, quelques  
82 faciles démarches à faire,—et me pressait fort d'accepter.  
83 J'hésitai, voyant surtout d'abord un esclavage; puis  
84 songeai qu'il pourrait être intéressant d'exposer, en un  
85 cours, mes travaux sur Cassiodore...Le plaisir que j'allais  
86 faire à Marceline, en fin de compte me décida. Et,  
87 sitôt ma décision prise, je n'en vis plus que l'avantage.

88 Dans le monde savant de Rome et de Florence, mon  
89 père entretenait diverses relations avec qui j'étais moi-  
90 même entré en correspondance. Elles me donnèrent  
91 tous moyens de faire les recherches que je voudrais,  
92 à Ravenne et ailleurs; je ne songeais plus qu'au travail.  
93 Marceline s'ingéniait à le favoriser par mille soins char-  
94 mants et mille prévenances.

95 Notre bonheur, durant cette fin de voyage, fut si  
96 égal, si calme, que je n'en peux rien raconter. Les  
97 plus belles œuvres des hommes sont obstinément  
98 douloureuses. Que serait le récit du bonheur? Rien que  
99 ce qui le prépare, puis ce qui le détruit, ne se raconte.  
100 Et je vous ai dit maintenant tout ce qui l'avait préparé.